

博士論文（要約）

大野一雄論——身体とエクリチュール

宮川 麻理子

謝辞

本博士論文執筆にあたり、ご指導いただきました東京大学総合文化研究科・表象文化論コースの先生方にお礼を申し上げます。とりわけ指導教授のパトリック・ドゥヴォス先生には、修士課程に入学して以降、長きにわたりご指導を賜りました。常に激励し、また知的好奇心をくすぐる様々な研究をご紹介していただきました。先生のお力添えなくしては、本論文は決して完成しなかったでしょう。本当にありがとうございました。

また資料の閲覧に当たっては、大野一雄アーカイヴの溝端俊夫さま、溝端美奈さま、慶應義塾大学・土方巽アーカイヴの森下隆さま、石本華江さまにご協力いただきました。このほか、快くインタビューに応じて下さった舞踏家やダンサーのみなさまにも、暑く御礼申し上げます。

そして何より、大野慶人先生からは、多くのことを学ばせていただきました。稽古に何度も参加させていただき、度重なる質問にも快くお答えいただきました。また大野一雄の蔵書をはじめとした資料も惜しみなく見せてくださいました。本論文に多くの資料を掲載できたのは、慶人先生のご協力のおかげです。完成が遅くなり、論文をお見せできないのは痛恨の極みですが、慶人先生に心からの感謝を申し上げます。

「大野一雄論——身体とエクリチュール」

目次

【序論】 舞踏家・大野一雄をめぐる諸言説および本研究の目的	1
第 1 節：大野一雄と舞踏——20 世紀の舞踊史上での重要性	3
1-1：舞踏小史、そのダンスの革命——土方巽と大野一雄のコラボレーションを中心に	3
1-2：海外公演の反響	7
第 2 節：大野一雄についての批評および先行研究とその問題点	11
2-1：批評の言葉	11
2-2：歴史的叙述とその盲点	13
2-3：身体・運動の分析	15
第 3 節：ダンスをめぐる言葉——大野一雄の創作ノートとは何か	17
3-1：創作ノート概要	18
3-2：先行研究での創作ノートの扱い	21
3-3：創作ノートの分析方法	23
【第 1 部】 大野一雄の体の使い方——身体の技法	26
第 1 章：過去の身体——大野が体験した身体文化	26
第 1 節：体操	27
1-1：1920 年代の体操の状況、および 1926～1929 年当時の日本体育会体操学校のカリキュラム	28
1-2：デンマーク体操、ボーデの表現体操、チューンの自然体操	30
1-3：マス・ゲーム《美と力》	35
第 2 節：表現主義舞踊	43
2-1：石井漠、江口隆哉、宮操子	43
2-2：ハラルド・クロイツベルク、マリー・ヴィグマン	51
第 2 章：動きの分析	58
第 1 節：1960 年の二つのテキスト	60
1-1：パントマイム	60
1-2：「日常の事から考えられる表現のメモ」	63

1-3：『けいこ』の断片	66
第2節：姿勢・視線・重心——1990年の稽古の映像より	68
2-1：姿勢	69
2-2：視線	71
2-3：重心	73
第3節：頭部、頸部、背中による姿勢の維持と表現性	76
第4節：身体の技法の伝承	80
4-1：大野慶人による稽古	80
4-2：川口隆夫による大野一雄の動きのコピー	82
4-3：カトリーヌ・ディヴェレス《Ô-sensei》に現れる身体の幽霊的回帰	87
【第2部】創作ノートによる振付の担保——大野一雄における「作品」概念の検討	91
第3章：《わたしのお母さん》——拘束と葛藤	92
第1節：作品概要（構成と創作ノート）	93
第2節：初演に至るまでの変化——創作ノートに見られる原型と消失したテキスト	97
第3節：折口信夫の『死者の書』——テキストの舞踏的な読み	103
3-1：ダンサーによるテキストの読み	103
3-2：創作ノートに見られる引用	106
3-3：蔵書（折口信夫『死者の書』）への書き込み	109
第4節：土方巽の舞踏譜による振付	114
4-1：土方巽の「舞踏譜の舞踏」	114
4-2：創作ノートに見られる土方巽の舞踏譜の言葉	119
4-3：大野による土方の舞踏譜の実践例	123
4-4：「胎児の夢」に見られる土方の振付	126
第5節：土方の舞踏譜、大野の記憶、『死者の書』の融合	129
第4章：《ラ・アルヘンチーナ頌》——創作ノートによる記憶・動きの生成	136
第1節：作品概要と1980年の海外公演を経ての変更点	136
第2節：動きを表す記号——モダンダンスの痕跡と動きのダイナミズム	142
2-1：踊跡（ヨウセキ）	142
2-2：動きのダイナミズムを示す痕跡	145

2-3：視覚的イメージの転写	148
第3節：「日常の糧」——従来の言説の裏にあるテキスト	151
3-1：「日常の糧」初演	151
3-2：テキストによって埋められる身振り	153
第4節：「アルヘンチーナの思い出」	157
4-1：ジェラルド・ドゥヴィルによる「ラ・アルヘンチーナ」	157
4-2：アルヘンチーナと闘牛のイメージの融合	159
第5節：批評の言説が踊りを固定していく——「ディヴィーナ抄」／「死と誕生」	162
第5章：大野一雄における「作品」概念	167
第1節：創作ノートを書き続けること、そのバリエーションの意味	167
第2節：「作品」の再演——振付と即興	169
第3節：ダンスとテキストをめぐる議論の中で	173
3-1：ノーテーション	173
3-2：「プリスクリプション」としての譜	175
第4節：大野一雄の「作品」	177
【第3部】大野一雄が目指した動きの美学	181
第6章：《睡蓮》——運動と知覚の実験場としての創作ノート	181
第1節：《睡蓮》概要と創作ノートの分析方法	182
第2節：「自分の声でない非常に多くの声」——引用から拾われる動き	188
第3節：テキストの中に書かれた運動	194
3-1：「ハレー彗星に横たわる女」	194
3-2：運動のシミュレーションの痕跡としての言葉	206
第4節：知覚の鍛錬の場としての創作ノート	210
第7章：創作ノートが生み出す新たな動き	217
第1節：微細な身振り、抑制された動きをめぐって	217
第2節：形が消えゆくもの／境界の混ざり合い——大野が目指した動きの美学	221
2-1：自己の解体	222
2-2：ジュネの身振り	225
第3節：アンフォルムと幽霊	228

【結論】大野の身体とエクリチュールの機能	235
第1節：大野の身体の変遷	235
第2節：創作ノートが担う複数の機能	240
第3節：戦争の記憶の回帰	243
図版一覧	247
文献一覧	297

図版一覧表

- 図 1 : 中西夏之《絵の形 13-h》(1973 年、亜鉛版に油彩、55×40cm) (大野一雄『大野一雄舞踏譜 (増補版) 一御殿空を飛ぶ』思潮社、1998 年、p.213)
- 図 2 : 日本体育会体操学校カリキュラム、1923 年改正版 (日本体育会百年史編纂委員会編『学校法人日本体育会百年史』日本体育会、1991 年、pp.792-3)
- 図 3 : デンマーク体操写真 (柳田享『デンマーク体操』三省堂、1931 年、ページ記載なし)
- 図 4 : 玉川教育研究所編『ボーデ表現体操アルバム』玉川学園出版部、1932 年、ページ記載なし。
- 図 5 : 玉川教育研究所編『チューン自然体操』玉川学園出版部、1932 年、ページ記載なし。
- 図 6 : 「第十回国民体育大会マス・ゲーム “祝典行進” 研究資料」(わら半紙、9 枚)、1955 年、大野一雄所蔵。
- 図 7 : (左) 大野一雄 (1940~50 年代、作品不明) ©大野一雄舞踏研究所
(右) ハラルド・クロイツベルク《司祭長の踊り》(*Ruth Page, Kreutzberg Available for Concerts, Jan. and Feb. 1935, J.F and March, 1936*, ページ記載なし)
- 図 8 : 大野一雄 (1940~50 年代、作品不明) ©大野一雄舞踏研究所
- 図 9 : ハラルド・クロイツベルク《「ドン・モルテ」の宮廷道化師の踊》(杉浦國吉編・発行『ハラルト・クロイツベルク氏ルース・ページ女史日本公演紹介批評解説写真 パンフレット』1934 年、p.3)
- 図 10 : マリー・ヴィグマン《魔女の踊り》(マリー・ヴィグマン『舞踊の表現』河井富美恵・林悦子訳、大修館書店、1982 年、左 p.45、右 p. 47)
- 図 11 : 《鬼哭》(1949 年) ©大野一雄舞踏研究所
- 図 12 : 《ラ・アルヘンチーナ頌》より「バンドネオンの嘆き」©大野一雄舞踏研究所
- 図 13 : ハラルド・クロイツベルク (*Ruth Page, Kreutzberg Available for Concerts*, ページ記載なし)
- 図 14 : (左) ハラルド・クロイツベルク (*Ruth Page, Kreutzberg Available for Concerts*, ページ記載なし)、
(右) 大野一雄《わたしのお母さん》©大野一雄舞踏研究所
- 図 15 : 大野一雄「肋骨のポジション」デモンストレーション、1990 年 7 月稽古の映像 (V0878) ©大野一雄舞踏研究所
- 図 16 : 大野一雄「肉屋につられた肉」デモンストレーション、1990 年 7 月稽古の映像 (V0878) ©大野一雄舞踏研究所
- 図 17 : 大野一雄、目線のデモンストレーション、1990 年 7 月稽古の映像 (V0879) ©大野

一雄舞踏研究所

- 図 18 : 大野一雄、「I want」が見える姿勢のデモンストレーション、1990年7月稽古の映像 (V0878) ©大野一雄舞踏研究所
- 図 19~21 : 《ラ・アルヘンチーナ頌》初演 (V0121) ©大野一雄舞踏研究所
- 図 22 : 《ラ・アルヘンチーナ頌》より
(左) 1982年 (KAZUO OHNO, Télévision Suisse Romande, Genève, 1982)
(右) 1986年 (V110) ©大野一雄舞踏研究所
- 図 23 : 川口隆夫《大野一雄について》(撮影 : Mara Arteaga、2017年5月20日メキシコシティ公演)
- 図 24 : 《わたしのお母さん》創作ノート 81.04.013.02 ©大野一雄舞踏研究所 (以下、創作ノートのナンバーのみ表記)
- 図 25 : 創作ノート 81.04.013.05
- 図 26 : 《O氏の死者の書》イメージ (ダンスアーカイヴ構想 HP、<http://www.dance-archive.net>、最終閲覧日 : 2020年3月5日)
- 図 27 : 創作ノート 81.04.016.01
- 図 28 : 創作ノート 81.04.016.04
- 図 29 : 創作ノート 81.04.013.07
- 図 30 : 創作ノート 81.04.013.09
- 図 31 : 創作ノート 81.04.013.10
- 図 32 : 折口信夫『死者の書』(第10版) 中央公論社、1980年、p. 141、大野一雄所蔵
- 図 33 : 折口、p. 69、大野一雄所蔵
- 図 34 : 折口、p. 13、大野一雄所蔵
- 図 35 : 折口、p. 55、大野一雄所蔵
- 図 36 : 創作ノート 81.04.060.01
- 図 37 : 創作ノート 81.04.060.07
- 図 38 : 《わたしのお母さん》初演 (V0025)、01:26:29~01:26:32 ©大野一雄舞踏研究所
- 図 39 : 《わたしのお母さん》初演、01:26:29~01:26:40 ©大野一雄舞踏研究所
- 図 40~44 : 《わたしのお母さん》より
(左) 初演
(右) 1982年コペンハーゲン公演 (V0347) ©大野一雄舞踏研究所
- 図 45 : 創作ノート 86.04.002.01
- 図 46 : 創作ノート 95.04.052.01
- 図 47 : 創作ノート 95.04.052.02

- 図 48 : 創作ノート 96.04.001.01
- 図 49 : 創作ノート 81.04.016.02
- 図 50 : 創作ノート 81.04.060.03
- 図 51 : 創作ノート 81.04.060.04
- 図 52 : 「死の階段」、以下全て《わたしのお母さん》初演より ©大野一雄舞踏研究所
- 図 53 : 「口から吹き出すバギナ」
- 図 54 : 「板戸をあける」
- 図 55 : 「狐とたぬきの合体だ」
- 図 56 : 「ベットから降りてくる怪しい花 (またぐら)」
- 図 57 : 《ラ・アルヘンチーナ頌》創作ノート 86.02.004.03、部分 ©大野一雄舞踏研究所 (以下、創作ノートのナンバーのみ表記)
- 図 58 : 創作ノート 86.02.004.03
- 図 59 : 創作ノート 94.02.017.01
- 図 60 : 創作ノート 86.02.004.04、部分
- 図 61 : 創作ノート 86.02.004.05、部分
- 図 62 : 創作ノート 86.02.004.06
- 図 63 : 創作ノート 00.02.024.05
- 図 64 : 創作ノート 00.02.030.01
- 図 65 : ルドルフ・フォン・ラバン「Choreographie」1926 (*Histoires de corps: à propos de la formation du danseur*. Paris: Cité de la musique, Centre de ressources musique et danse, 1998, p.225)
- 図 66 : 創作ノート 94.02.036.01
- 図 67 : 創作ノート 94.02.037.01
- 図 68 : 曾我蕭白「雪山童子図」継松寺 (狩野博幸編著『日本の美術 第 258 号 曾我蕭白』文化庁、東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館監修、至文堂、1987 年、p.1)
- 図 69 : 曾我蕭白「柳下鬼女図屏風」東京藝術大学 (狩野、p.13)
- 図 70 : (左) 《ラ・アルヘンチーナ頌》初演より「日常の糧」 ©大野一雄舞踏研究所
(右) デンマーク体操 (羽仁淳『デンマーク体操』杏林書院体育の科学社、1968 年 (初版: 1961 年)、p. 39)
- 図 71 : (上) 《ラ・アルヘンチーナ頌》初演より「日常の糧」 ©大野一雄舞踏研究所
(下) デンマーク体操 (羽仁、p. 33)
- 図 72 : 《ラ・アルヘンチーナ頌》初演より「日常の糧」 ©大野一雄舞踏研究所

- 図 73 : 創作ノート 86.02.007.01
- 図 74 : 創作ノート 00.02.009.02
- 図 75 : 創作ノート 00.02.032.01
- 図 76 : 蘆原英了『舞踊と身体』新宿書房、1986 年、p.193、大野一雄所蔵
- 図 77 : 創作ノート 00.02.026.01
- 図 78 : 《睡蓮》創作ノート_06.012.07©大野一雄舞踏研究所（以下、創作ノートのナンバーのみ表記）
- 図 79 : 創作ノート_06.003.06
- 図 80 : 創作ノート_06.008.07
- 図 81 : 創作ノート_06.004.02
- 図 82 : 創作ノート_06.003.03
- 図 83 : 《睡蓮》1990 年（V0236）©大野一雄舞踏研究所
- 図 84 : 創作ノート 88.06.001.03
- 図 85 : 創作ノート 88.06.001.04
- 図 86 : 《睡蓮》1990 年©大野一雄舞踏研究所
- 図 87 : 創作ノート_06.013.01
- 図 88 : G.ウィットウォース『ニジンスキーの芸術』馬場二郎訳、現代思潮社、1977 年、pp. 112-113、大野一雄所蔵
- 図 89 : 創作ノート_06.012.05
- 図 90 : 創作ノート_06.048.02
- 図 91 : 創作ノート_06.003.01
- 図 92 : 創作ノート_06.022.01
- 図 93 : 創作ノート_06.021.07
- 図 94 : 創作ノート_06.034.01
- 図 95 : 創作ノート_06.003.04
- 図 96 : 創作ノート_06.012.03
- 図 97 : 創作ノート_06.047.01
- 図 98 : 創作ノート_06.047.02
- 図 99 : 宇野邦一『ジュネの奇蹟』日本文芸社、1994 年、pp. 44-45、大野一雄所蔵
- 図 100 : 宇野『ジュネの奇蹟』 pp. 194-195、大野一雄所蔵
- 図 101 : 宇野『ジュネの奇蹟』 pp. 164-165、大野一雄所蔵
- 図 102 : 創作ノート_06.021.02

本編：A4版 315 ページ。5年以内に刊行予定。

【本論要旨】

1977年に《ラ・アルヘンチーナ頌》を発表した大野一雄（1906-2010）は、1980年以降世界中をツアーで周り、「舞踏／Butoh」の創始者としてその名が広まった。大野、そして土方巽によって始められたこの舞踏は、ダンスの概念を覆し、日英ほか各国語による批評や研究書も登場するなど、20世紀舞踊史の転換点として極めて重要な現象となっている。今日でも、舞踏を再解釈するパフォーマンスが誕生し、その影響力は衰えていない。しかし「魂」や「即興」という枕詞に覆われ、大野の身体性や作品制作の方法論を余すところなく解き明かした研究は未だ存在しない。

本論文では、大野の舞踏の基盤となる身体が形成される過程を、大野が体験した20世紀の身体文化、とりわけ先行研究で精査されていない体操およびパントマイムから着想を得た身体観を中心に論じ、心身の結びつきを重視するソマティクスに近似した思想を明らかにする。ついで、こうして培われた身体をもって大野が1977年以降「作品」を制作する際にとった方法論を、「創作ノート」を中心に検討する。創作ノートとは、大野が言葉や文章、デッサンを書き、稽古やリハーサルで参照したメモの総称である。大野が舞踏を生み出すために必要としたイメージが集積した創作ノートは、5000枚近くにも及ぶ。大野はなぜ、踊るためにこれほど大量に言葉を書く必要があったのか。ダンサーと言葉をめぐる議論の中で大野の創作ノートの特殊性を検討しつつ、テキストを書くという行為、および豊穡なイメージを呼び起こす言葉に溢れた創作ノートから大野の美学を明らかにする。

分析対象は、創作ノートを中心としたテキスト群と、舞台および稽古の記録映像である。動きの分析に際しては、H・ゴダールの理論を参照し、フィギュールよりも身振りの「地」（前-運動と呼ばれる姿勢の維持や、その一環をなす視線、情動、および重力との関係性）によって左右される表現性に注目した。また創作ノートの分析にあたっては、M・ベルナールの提唱した諸感覚のキアスムに基づく舞踊的なテキストの読みの可能性と、A・ゴッドフロワによる言葉とソマティクスに関する研究、G・ボランスおよびJ・ペランの知覚とテキストの関連を論じた先行研究を下敷きにした。

【第1部】「大野一雄の体の使い方——身体の技法」では、大野が体験した過去の身体文化がいかに彼の身体を形成し、どのようにその影響が見られるかを論じた。大野は、H・クロイツベルクの舞台および江口隆哉・宮操子の元での研鑽を通じ表現主義舞踊と接点を持った。その痕跡はまず、フィギュールの類似として観察できる。だが大野は習得したダンステクニックを否定し、1960年代に土方と新たな舞踏の探究を始める。こうして否定された表現主義舞踊はしかし、日本では受容されなかった側面、すなわち身体の末端への集中

など、S・パジェスが指摘した身振りの「地」を生み出す操作において、再び大野の身体に現れる。さらに大野は踊る際に不在の他者を想定するが、それはM・ヴィグマンが語った「見えないパートナー」に極めて近いものであった。

本論文が特に重視したのが、1990年代の大野の動きに継承される、体操とパントマイムの影響である。大野が体操学校に在学したのは、当時の新興体操がカリキュラムに採用された時期であり、ドイツ由来の表現体操や、生命の自然なリズムを尊重する自然体操に触れていた。戦後、大野は女学校で体操を教えたが、ここで注目すべきは1955年に指導したマス・ゲームである。当該資料からは、視線や姿勢への細かな言及など、後年の大野の身体観に共通する要素が見出される。同様に、1960年に書かれたテキストでは、目の表現の重要性や理想的な姿勢（頭頂部を高く保ち、肋骨を引く）を論じ、J=L・バローの演劇論を引きながら、歩行と重力処理についても思索している。以上の点から、大野は直立姿勢を支える根幹と、そこから繰り出される表現性、心身のつながりに意識的であり、ソマテイクスに近い身体観を持っていたことが導き出された。これらが大野の舞踏の身体・運動の核となっていることは、この独自の姿勢、視線、重心操作が1990年の稽古映像にも見られることから明らかである。こうした大野の身体の技法は、近年、川口隆夫による大野を参照したパフォーマンスにも引き継がれ、舞踏の新たな継承の可能性が広がっている。

【第2部】「創作ノートによる振付の担保——大野一雄における『作品』概念の検討」では、作品制作の中で創作ノートが担った役割を分析した。最初に《わたしのお母さん》を取り上げ、創作ノートに残る土方巽の舞踏譜の痕跡を指摘した。だが土方の弟子ではない大野にとって、その振付は完全な拘束とはならず、大野自身によって醸成されたイメージと折衷される。大野は、自身の記憶、および折口信夫の『死者の書』からの引用を、土方の言葉と混成する形で創作ノートに書き、イメージを重層的に構築していった。こうして練り上げられた振付は、初演から年月を経ても、書き直されたノートにその痕跡が残存する。つまり本作では、即興性を排除こそしないものの、土方による舞踏譜、折口のテキスト、そして自身の記憶を混成しながら書き重ねられた創作ノートによって、振付・作品性が担保されている。

再演において維持される準拠枠としての振付は、大野が世界的認知を得る契機となった《ラ・アルヘンチーナ頌》にも指摘できる。本作の創作ノートにおいてそれは、江口の舞踊創作法の影響を残す「踊跡」や、動きのダイナミズムを描き出すデッサンの中に、そして他者の記憶や批評の言葉によって練り上げられたテキストの中に見られる。また、例えば大野が魅了された舞姫ラ・アルヘンチーナに関する記述は、その不在の他者のイメージを強調し、踊るために必要な情動を喚起するが、そのような記述には大野の記憶を補強する批評の言葉も引用されている。こうして書き込まれた豊穡なイメージは、上演にあって

は身振りの背景に溶け込んでしまうが、それらは大野の情動や意識へ作用し、身体を動かしたのである。

創作ノートは、振付を振付として担保し、作品の核を維持して再演を可能にしたが、それは「不確定の要素を持った振付」であった。そこには、作品を固定させない要素、すなわち身体表現性に影響を与える情動や欲望も、上演の都度新たに書き込まれた。F・プライヨードは、ダンスは美学で伝統的に論じられてきた「作品」概念に挑み、それを解体していくダイナミズムを持つと指摘したが、大野の作品はまさに、自ら設定した振付を身体表現性によって解体しつつ、再構築していくものである。

【第3部】「大野一雄が目指した動きの美学」では、演出を担った土方の死後制作された《睡蓮》を取り上げ、大野の舞踏の訓練とは、言葉によって身振りに先行する情動へ働きかけ、テキストの中で運動・知覚をシミュレートすることであると明らかにした。本作で大野は、モネの絵画よりインスピレーションを得て、「見えない」視覚の状態に関心を持ちながら、知覚や運動に関するテキストを書いていく。言葉は、ソマティクスにおける言語作用を分析したゴッドフロウに依拠すれば、身振りを生み出す地へと働きかける。またバランスによれば、脳は、知覚および動きが言語的に示される時にもその行為をシミュレートしている。したがってテキストは、踊る身体を豊かにする知覚訓練の場となり、大野はテキストを書くことで、理想の踊りを探究していたと考えられる。そうして蓄積されていた運動の「経験」は、実際の動きへ反映される。その動きは自身の中で受容され、新たな感覚やイメージへと接続され、再びテキストの中に書き込まれる。こうして大野が目指した踊りは、周囲の環境との境界が溶解し、明確な形を失い、出現しては消滅する像としての、両性具有者の身振りである。この像は第一に、対立する概念を攪乱し無効にするというその操作において、また第二に輪郭がなくなり、ある形にとどまることがないという点において、アンフォルムの概念へと接続可能である。

大野は引用という形で他者の思考やイメージを取り入れ、積極的に自己を解体し、自他の境界がなくなっていく状態を志向した。それは大野が、語り得ない戦争体験を丸々と抱えた自己を自己として断定することを無意識に避け、積極的に他者を取り入れることを望んだ証である。創作ノートのエクリチュールには、その戦争体験が、アルヘンチーナや母といった表象の中に加害／被害の両面を伴って湧出している。大野の舞踏は20世紀の歴史・社会的状況を引き受けた身体によって作り上げられたものであり、そこには体操やダンス等の身体文化のみならず、否応無く介入させられた戦場での経験も含まれている。

20世紀の舞踊史に大野が提示したものは、歴史の結節点としての身体であり、土方という伴走者によって触発され、独自の身振りとして作り上げた舞踏である。それはまた、多様なエクリチュールの実践、およびそれが身体へともたらす作用によって練り上げられた

ものだ。したがって大野においてテキストを書くという創作方法は、他者への伝達機能を持つ記号化されたノーテーションやスコアとは根本的に異なるものである。創作ノートは、土方巽の舞踏譜や振付を定める言葉、運動の軌道を描いたデッサンなどあらゆる要素を含有しつつ、それに収まらないものであり、きたるべき動き・知覚の訓練を行うものでもあった。この方法論は、執拗なまでに言葉を書き続けた大野独自のものである。そのテキストは、他者の声（文学作品、詩、批評の言葉）が引用された大きな記憶の集積でもあり、大野はこれらの声によって踊りを作り出していたのだ。

文献一覧

■一次文献・資料

【大野一雄 創作ノート】大野一雄舞踏研究所所蔵

《ラ・アルヘンチーナ頌》

《わたしのお母さん》

《睡蓮》

【土方巽 舞踏譜】慶應義塾大学アート・センター 土方巽アーカイヴ所蔵

和栗由紀夫『舞踏譜』（コピー）

〈動きのアーカイヴ〉のための撮影資料、2004年。

【映像資料】

『あんま』監督：飯村隆彦、1963年。

『O氏の死者の書』監督：長野千秋、1976年、大野一雄舞踏研究所所蔵

『O氏の曼陀羅——遊行夢華』監督：長野千秋、1971年、大野一雄舞踏研究所所蔵。

『大野一雄 ロングインタビュー』NHK エンタープライズ、DVD、2006年。

『KAZUO OHNO & O氏の肖像』監督：ダニエル・シュミット／長野千秋、かんだ、DVD、2004年。

川口隆夫《大野一雄について》記録映像、ミュンスター、2015年およびカーン、2017年。

《睡蓮》記録映像：V1072（1987）、V0157・V1345（1988）、V0236・V0936（1990）、V0239（1992）、V0298（1993）、V0360（1994）、V0366・V0867（1997）、大野一雄舞踏研究所所蔵。

「1990年7月18日稽古の記録映像」V0878、大野一雄舞踏研究所所蔵。

「1990年7月21日稽古の記録映像」V0879、大野一雄舞踏研究所所蔵。

『バラ色ダンス』監督：飯村隆彦、1965年。

『土方巽舞踏譜の舞踏』監修・慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイヴ、制作：慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構、2007年。

『美と力』NHK ソフトウェア、VHS、2001年。

『舞踏花伝』和栗由紀夫原案・監修、ニューサイト、DVD-ROM、2004年。

《ラ・アルヘンチーナ頌》記録映像、リハーサルの映像も含む。整理・保存のための通し

番号と上演年を以下に記載：V0121 (1977)、V0130・V0131・V0134 (1985)、V0128・V0129・V0659 (1986)、V0089 (1994)、大野一雄舞踏研究所所蔵。

「和栗由紀夫 動きのアーカイヴ Extra version」2011年11月、DVD-ROM。

『和栗由紀夫「舞踏譜」による「動きのアーカイヴ」撮影記録』2019年、慶應義塾大学アート・センター 土方巽アーカイヴ所蔵。

《わたしのお母さん》記録映像：V0025 (1981)、V0347 (1982)、V0365 (1995)、V0300 (1996)、V0723 (1998)、大野一雄舞踏研究所所蔵。

[Art Summit Indonesia 8] Takao Kawaguchi | Session #2, Presentation About Kazuo Ohno: Choreographic Process Takao Kawaguchi, August 20th, 2016, Studio Plesungan, Solo, <https://www.youtube.com/watch?v=Ib6rMCpIdt4> (最終閲覧日：2019年8月31日)

Catherine Diverrière, *Ô Senseï* in “scènes/ d’écran.” Interview directed by Luc Riolon, 24 images-Gie grand ouest télévision, 2012.

Harald Kreutzberg. mp4 on Vimeo, <https://vimeo.com/89251190> (最終閲覧日：2019年11月10日)

« Jean-Louis Barrault mime *Le Cheval* », 1984. *En Scène : le spectacle vivant en video*, <http://fresques.ina.fr/en-scenes/fiche-media/Scenes00805/jean-louis-barrault-mime-le-cheval.html> (最終閲覧日：2019年11月3日)

KAZUO OHNO, Télévision Suisse Romande, Genève, 1982.

Xavier Le Roy 《Produit d’autres circonstances》記録映像、リスボン、2011年。

【舞台】

「ダンス・アーカイヴ in JAPAN」2014年6月6日19時 (新国立劇場中劇場)

川口隆夫《大野一雄について》初演「ダンスが見たい! 15」2013年8月8日19時30分、(日暮里d-倉庫)、「大野一雄フェスティバル」10月24日20時 (BankART)、「Dance Archive Project 2015」2015年2月11日18時 (BankART)、2017年12月2日15時 (彩の国さいたま芸術劇場小ホール)

Catherine Diverrière 《Ô Senseï》2012年11月10日17時 (国立シャイヨー劇場、パリ)

Trajal Harrell 《Return to La Argentina》2016年9月4日15時 (72-13、シンガポール)

【ウェブサイト】

ダンスアーカイヴ構想 HP、<http://www.dance-archive.net> (最終閲覧日：2020年3月5日)

日)

和栗由紀夫舞踏花伝 HP、<https://butoh-kaden.com/ja/> (最終閲覧日: 2020年2月26日)

Yukio Waguri Butoh HP, <https://otsukimi.net/koz/#top> (最終閲覧日: 2019年9月11日)

【書籍・刊行物】

芦田献之『大野一雄年代記』風鐸舎、1979年11月。

大野一雄「生きることへの愛情」『現代舞踊』1957年5月号、pp. 30-31。

——「日常の事から考えられる表現のメモ」『パントマイム ジャン・ヌーボ リサイタル』公演パンフレット、1960年、pp. 2-3。

——「幽霊と舞踏——私の心象風景」『ユリイカ』第15巻11号、1983年、pp. 129-135。

——「舞踏神は語る」『現代詩手帖』vol. 30、no. 6、1987年、pp. 50-54。

——「モボ・モガの時代③大野一雄 帝劇の一夜が、私をダンサーに導いた」『太陽』no. 311、1987年、pp. 100-104。

——「幕があき“81歳の作品”」『日本経済新聞』1988年8月16日、28面。

——『dessin』緑鯨社、1992年。

——『大野一雄 稽古の言葉』大野一雄舞踏研究所編、フィルムアート社、1997年。

——「私のなかの歴史」10回連載『北海道新聞』夕刊、6版、1997年2月17-19日、21-22日、24-28日、全て2面。

——『大野一雄舞踏譜（増補版）——御殿、空を飛ぶ』思潮社、1998年。

——「宇宙の分霊として——大野一雄インタビュー」『現代詩手帖』2010年9月号、pp. 144-151。

『大野一雄 石狩の鼻曲がり——石狩川河口公演記録集』かりん舎、2002年。

大野一雄他『大野一雄』青樹社、1997年。

「大野一雄インタビュー」今野裕一編『夜想』「特集・《暗黒舞踏》Dance Review 1920-80 Japan」9号、1983年、pp. 16-22 (16)。

大野一雄、大野慶人、インタビュー「舞踏という表現方法」『現代詩手帖』vol. 35、no. 6、1992年、pp. 18-33。

大野一雄、大野慶人、中村文昭「鼎談 命の舞踏・その歓び」『江古田文学』第31号、1996年、pp. 6-37。

大野一雄舞踏研究所編『大野一雄 百年の舞踏』フィルムアート社、2007年。

大野一雄舞踏研究所編『大野一雄年代記 1906-2010』有限会社かんだ、2010年。

大野慶人+大野一雄舞踏研究所『大野一雄 魂の糧』フィルムアート社、1999年。

『神奈川 1955「第10回国民体育大会」主催日本体育協会・文部省・神奈川県』紀要、1955

年。

「昭和 30 年度予定表」(捜真女学校) 1955 年。

「第十回国民体育大会マス・ゲーム(高等学校の部)研究資料」(わら半紙、8 枚) 1955 年。

「第十回国民体育大会マス・ゲーム“祝典行進”研究資料」(わら半紙、9 枚) 1955 年。

細江英公『細江英公人間写真集 胡蝶の夢 舞踏家・大野一雄』青幻社、2006 年。

溝端俊夫編『大野一雄九十七歳の履歴書』BankART1929、2004 年。

溝端俊夫編『大野一雄と土方巽の 60 年代』BankART1929、2005 年。

溝端俊夫編『大野一雄百歳の年』BankART1929、2007 年。

森下隆作成「土方巽の／言葉が／記号に／身体へ——和栗由紀夫『舞踏譜』より」チラシ。

Oono, Kazuo, «La danse ichtyoïde de Kazuo Oono», *Libération*, 8, juin, 1982, p. 31.

Ohno, Kazuo. Interview with Richard Schechner. “Kazuo Ohno Doesn’t Commute”, *The Drama Review* 30.2 (Summer 1986), pp. 163-169.

■二次文献

■日本語文献

相原朋枝「舞踏家・大野一雄の活動——1977 年作品『ラ・アルヘンチーナ頌』以前」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第 56 巻、2003 年、pp. 153-166。

アガンベン、ジョルジョ『人権の彼方に——政治哲学ノート』高桑和巳訳、以文社、2000 年。

芦田献之「大野一雄試論Ⅱ供犠と遊戯(上)」『肉体言語』vol. 11、1983 年、pp. 196-202。

——「大野一雄試論Ⅲ供犠と遊戯(下)」『肉体言語』vol. 12、1985 年、pp. 192-200。

蘆原英了『現代舞踊評話』西東書林、1935 年。

——『舞踊と身体』新宿書房、1986 年。

尼ヶ崎彬「日本における『老い』と『踊り』」中島那奈子・外山紀久子編著『老いと踊り』勁草書房、2019 年、pp. 191-220。

天児牛大『重力との対話——記憶の海辺から山海塾の舞踏へ』岩波書店、2015 年。

『アルトー館通信』No. 1、アルトー館、1966 年。

石井達朗『アウラを放つ闇——身体行為のスピリット・ジャーニー』PARCO 出版、1993 年。

——「神の嫁のたまふりのまつり」立木鷹志編『天人戯楽——大野一雄の世界』青弓社、1993 年、pp. 75-104。

——「老いと舞——大野一雄と世阿弥のこと」大野一雄『大野一雄舞踏譜(増補版)——

- 御殿、空を飛ぶ』思潮社、1998年、pp. 317-320。
- 石光泰夫『身体——光と闇』未来社、1995年。
- 市川雅『舞踊のコスモロジー』勁草書房、1983年。
- 稲田奈緒美「1970年代暗黒舞踏の技法研究」『演劇研究センター紀要』II、早稲田大学21世紀COEプログラム〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉、2004年、pp. 49-59。
- 『土方巽 絶後の身体』日本放送出版協会、2008年。
- 「踊る文体を読む」京都造形芸術大学舞台芸術センター編『土方巽——言葉と身体をめぐって』角川学芸出版、2011年、pp. 128-142。
- 岩原拓「歐米諸國に於ける體育の状況」『國民體育』1929年5月号、pp. 56-64。
- 岩本一「間テクスト性——その展開と関連性について」『dialogos』1号、2001年、pp. 39-57。
- ヴィグマン、マリー『舞踊の表現』河井富美恵・林悦子訳、大修館書店、1982年。
- ウィットウォース、G『ニジンスキーの芸術』馬場二郎訳、現代思潮社、1977年。
- 上杉満代インタビュー（於：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎）、2019年1月21日。
- 宇野邦一『ジュネの奇蹟』日本文芸社、1994年。
- 「二〇〇一年の身体」栗原彬・小森陽一他編『越境する知 1 身体：よみがえる』東京大学出版会、2000年、pp. 17-38。
- 江口隆哉『歩く』目黒書店、1941年。
- 『学校に於ける舞踊』明星社、1948年（初版1947年）。
- 『舞踊創作法』カワイ楽譜、1961年。
- 江澤健一郎「訳者解題」ジョルジュ・バタイユ『ドキュマン』江澤健一郎訳、河出書房新社、2014年、pp. 294-328。
- 及川廣信「エティエンヌ・ドゥクルーとその時代——現代マイムの確立まで」エティエンヌ・ドゥクルー『マイムの言葉——思考する身体』小野暢子訳、ブリュッケ、1998年、pp. 247-254。
- 「講演：大野一雄の舞踏について——アルトシステムからの観察〈脚注〉」『舞踊学』第34号、2012年、pp. 77-82。
- 「HIRONOBU OIKAWA」ブログ、<http://scorpio-oik.blogspot.jp>（最終閲覧日：2016年6月29日）
- 「60年代前後をふりかえる その肉体性の奪還」OIKAWA HIRONOBU archive、HP、<https://sites.google.com/site/oikawahironobu/Home/60nendai>（最終閲覧日：2016年6月29日）
- 及川廣信インタビュー（於：東京、アルト一館）2015年12月25日、2016年2月26日。
- 大塚正美「体育の歴史と役割」『城西国際大学紀要』19(1)、2011年、pp. 137-145。

- 鴻英良「虚体、死体、そして〈外〉へ——二一世紀のダンスの理念に向けて」東浩紀編『ゲンロン 5 幽霊的身体』ゲンロン、2017年、pp. 108-129。
- 大野慶人インタビュー（於：上星川、大野の自宅にて）2016年5月31日。
- 岡本章編著『大野一雄・舞踏と生命——大野一雄国際シンポジウム 2007』思潮社、2012年。
- 小原國芳『體育の理論と實際』玉川学園出版部、1930年。
- 「チューン伯の自然體操について」玉川教育研究所編『チューン自然體操』玉川学園出版部、1932年、pp. 1-7。
- 折口信夫『死者の書』（第10版）中央公論社、1980年。
- 笠井叡『未来の舞踊』ダンスワーク 54号、ダンスワーク舎、2004年。
- インタビュー（於：天使館）、2009年11月20日。
- 『カラダという書物』書肆山田、2011年。
- 笠井叡・笠井久子インタビュー「いままた、踊りはじめる」『現代詩手帖』2010年9月号、pp. 76-85。
- 片岡康子「時代の芸術家としての石井漠像——一九二〇年代の西洋文化流入と舞踊」長谷川六編『石井漠研究』ダンスワーク舎、1986年、pp. 17-44。
- 狩野博幸編著『日本の美術 第258号 曾我蕭白』文化庁、東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館監修、至文堂、1987年。
- 神澤和夫『20世紀の舞踊』未來社、1990年。
- 川口隆夫インタビュー（於：新宿の喫茶店）、2017年7月19日。
- 川崎市岡本太郎美術館、慶應義塾大学アート・センター編『土方巽の舞踏——肉体のシュルレアリスム 身体のアントロジー』慶應義塾大学出版会、2004年。
- 木村覚『『死者』と一緒に踊る老体——『ラ・アルヘンチーナ頌』の分析』『言語文化』第25号、2008年、pp. 29-39。
- 木村真知子『自然体育の成立と展開——運動学的観点から』不昧堂出版、1989年。
- ギルディナー、アリナ「極小の動きと巨大な感情——心を揺すぶる強烈なイメージ」大野一雄『大野一雄舞踏譜（増補版）——御殿、空を飛ぶ』思潮社、1998年、pp. 350-351
〔Alina Gildiner, “Striking images convey ebb and flow of emotions”, *The Globe and Mail*, September 29, 1990〕。
- 日下四郎『現代舞踊がみえてくる』沖積舎、1997年。
- グッドマン、ネルソン『芸術の言語』戸澤義夫・松永伸司訳、慶應義塾大学出版会、2017年。
- 國吉和子「舞踏譜試論——土方巽の資料から」『Inter Communication』No. 29, Summer、

- 1999年、pp. 80-87。
- 『夢の衣裳・記憶の壺——舞踊とモダニズム』新書館、2002年。
- 「土方巽と暗黒舞踏——見出された肉体」川崎市岡本太郎美術館、慶應義塾大学アート・センター編『土方巽の舞踏——肉体のシュルレアリスム 身体のアントロジー』慶應義塾大学出版会、2004年、pp. 8-13。
- 「土方巽と美術——『舞踏ノート』における引用図版と舞踏の言葉を参考として」『多摩美術大学研究紀要』第22号、2007年、pp. 105-122。
- 「暗黒舞踏登場前夜——大野一雄作品『老人と海』から見た1959年」『舞踊学』第31号、2008年、pp. 22-33。
- 『「病める舞姫」試論』京都造形芸術大学舞台芸術センター編『土方巽——言葉と身体をめぐる』角川学芸出版、2011年、pp. 171-204。
- 「暗黒舞踏登場前夜——戦後日本のモダンダンスと大野一雄」岡本章編著『大野一雄・舞踏と生命——大野一雄国際シンポジウム2007』思潮社、2012年、pp. 43-94。
- 久保隆司『ソマティック心理学』春秋社、2011年。
- Kurakata et al. 『プチ・ロワイヤル仏和辞典（第3版）』旺文社、2003年。
- 桑原和美「第5章 高らかに舞踊創作の灯をかかげて」片岡康子編『日本の現代舞踊のパイオニア——創造の自由がもたらした革新性を照射する』新国立劇場情報センター、2015年、pp. 65-76。
- 合田成男「土方巽と大野一雄の舞踏の現在」種村季弘、鶴岡善久、元藤燐子編『土方巽舞踏大鑑——かさぶたとキャラメル』悠思社、1993年、pp. 14-21。
- コーカー、ケイトリン『暗黒舞踏の身体経験——アフェクトと生成の人類学』京都大学学術出版会、2019年。
- 後藤繁雄編著『独特老人』筑摩書房、2001年。
- 小林嗟峨『うめの砂草——舞踏の言葉』アトリエサード、2005年。
- 今野裕一「復活の舞台のために予め用意された序章」『現代詩手帖』vol. 28、no. 6、1985年、pp. 133-137。
- 今野裕一編『夜想』「特集・《暗黒舞踏》Dance Review 1920-80 Japan」9号、1983年。
- 齋藤由理男『ニルス・ブック 基本體操の解説』玉川學園出版部、1932年。
- 酒井敦「にんげん大野一雄」立木鷹志編『天人戯楽——大野一雄の世界』青弓社、1993年、pp. 112-133。
- 坂口勝彦、西田留美可『Dance Archive Project 2017 戦場のモダンダンス 江口隆哉・宮操子 前線舞踊慰問の軌跡』溝端俊夫編、大野一雄舞踏研究所、2017年。
- 坂本秀子、光安知佳子、岡野友美子「江口隆哉作品『日本の太鼓』の特徴に関する一考察」

- 『日本女子体育大学紀要』43、2013年、pp. 129-138。
- 左川ちか「神秘」『左川ちか詩集』<https://sagawachika.jimdofree.com>（最終閲覧日：2020年3月14日）
- 佐々木敦『即興の解体／懐胎 演奏と演劇のアポリア』青土社、2011年。
- 佐々木浩雄『体操の日本近代——戦時期の集団体操と〈身体の国民化〉』青弓社、2016年。
- 沢田允茂『昭和の一哲学者——戦争を生きぬいて』慶應義塾大学出版会、2003年。
- 志賀信夫「ラ・アルヘンチーナと大野一雄」『Corpus 身体表現批評』第1号、2007年、pp. 31-45。
- 志賀信夫編『Corpus 身体表現批評』「特集 大野一雄」第1号、2007年。
- 澁澤龍彦『夢の宇宙誌』河出書房新社、1993年。
- 「泳ぐ悲劇役者」大野一雄『大野一雄舞踏譜（増補版）——御殿、空を飛ぶ』思潮社、1998年、p.250。
- 清水正『土方巽を読む——母性とカオスの暗黒舞踏』鳥影社、2002年。
- シュケ、アニー「ステージ——踊る身体：知覚の実験室」下澤和義訳、アラン・コルバンほか監修『身体の歴史Ⅲ』藤原書店、2010年、pp. 474-501。
- ジュネ、ジャン「花のノートルダム」『ジャン・ジュネ全集』第二巻、堀口大學訳、新潮社、1967年。
- ジュフロワ、アラン『不在の画家アンリ・ミショー』小海永二訳、昭森社、1966年。
- 「シンポジウム 江口隆哉を語る」『舞踊学』増刊号第一巻、1999年、pp. 86-88。
- 菅井京子「表現体操の方法論について——ルドルフ・ボーデの『表現体操』より」『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』第4号、2007年、pp. 139-143。
- 「『ドイツ体操（Deutsche Gymnastik）』に果たしたルドルフ・ボーデの貢献について」『スポーツ史研究』第26号、2013年、pp. 1-16。
- 杉浦國吉編・発行『ハラルト・クロイツベルク氏ルース・ページ女史日本公演紹介批評解説寫眞 パンフレット』1934年。
- 鈴木力衛「ジャン・ルイ・バローの『演劇についての考察』——マイム及びパントマイムについて」『新劇』1954年4月号、No. 1。
- セランド、エリック「^{ホーナムカミング}本質への回帰——真実を知ることの苦悩」城戸朱理訳、大野一雄『大野一雄舞踏譜（増補版）——御殿、空を飛ぶ』思潮社、1998年、pp. 314-317。
- 芹沢俊介「わがままの限りを尽くして——大野一雄試論」『現代詩手帖』vol. 35、no. 6、1992年、pp. 50-54。
- 高橋和子「大野一雄のダンス教育に関する一考察——捜真女学校時代の指導経緯を中心として」『日本女子体育連盟学術研究』27(0)、2011年、pp. 1-20。

- 立木燐子「大野一雄百歳 生命の輝きいや増して——大野一雄インタビュー」『Corpus 身体表現批評』第1号、2007年、pp. 11-16。
- 立木鷹志編著『天人戯楽——大野一雄の世界』青弓社、1993年。
- 玉川教育研究所編『ボーデ表現体操アルバム』玉川学園出版部、1932年。
- 『チューン自然体操』玉川学園出版部、1932年。
- 玉川大学、玉川学園公式HP、「玉川豆知識 No. 21」
https://www.tamagawa.jp/social/useful/tamagawa_trivia/tamagawa_trivia-21.html
(最終閲覧日：2019年8月31日)
- チェントンツェ、カティア「土方巽の肉体論——死体から出発すること」ボナヴェントウーラ・ルペルティ編著『日本の舞台芸術における身体——死と生、人形と人工体』晃洋書房、2019年、pp. 263-282。
- 辻惟雄『奇想の系譜』ペリかん社、1988年。
- ドゥヴォス、パトリック「1980年代の大野一雄——フランスでの舞台評を読む」『舞踊學』第34号、2011年、pp. 92-96。
- ドゥクルー、エティエンヌ『マイムの言葉——思考する身体』小野暢子訳、ブリュッケ、1998年。
- 遠丸立「客席から——大野一雄寸描」『現代詩手帖』1992年6月、pp. 34-38。
- 外山紀久子『帰宅しない放蕩娘——舞踊のモダニズムとポストモダニズム』勁草書房、1999年。
- 中川一彦「柏倉松蔵と日本体育会体操学校の教育に関する研究」『筑波大学体育科学系紀要』6号、1983年、pp. 21-27。
- 中島那奈子・外山紀久子編著『老いと踊り』勁草書房、2019年。
- 永田耕衣「大野一雄の世阿弥」大野一雄『大野一雄舞踏譜（増補版）——御殿、空を飛ぶ』思潮社、1998年、pp. 312-314。
- 中村秋一『ドイツ舞踊文化』人文閣、1941年。
- 中村文昭『舞踏の水際』思潮社、2000年。
- 「舞踏のおしえ——大野一雄と舞踏史」立木鷹志編『天人戯楽——大野一雄の世界』青弓社、1993年、pp. 11-41(26)。
- 西田正秋『顔の形の美しさ——人体美学の研究より』青娥書房、2007年。
- 西宮安一郎編『モダンダンス——江口隆哉と芸術年代史』東京新聞出版局、1989年。
- 日本体育会百年史編纂委員会編『学校法人日本体育会百年史』日本体育会、1991年。
- 貫成人「〈不気味なもの〉としての身体——現代アート、現代舞踊、反・本質主義の現象学」『思想』no. 916、2000年、pp. 244-262。

- 「老いと舞踊の哲学-絶対的他者としての老者の舞」中島那奈子・外山紀久子編著『老いと踊り』勁草書房、2019年、pp. 65-91。
- 野坂政司「即興あるいは準抛枠」モダニズム研究会編『表象からの越境——モダニズムの越境Ⅲ』人文書院、2004年、pp. 185-205。
- 野田はるか「エチエンヌ・ドゥクローが見つめた人間——コーポラルマイムの世界」『表現文化』3、2008年、pp. 85-95。
- バーカー、サラ『実戦講座 7 能力を出しきるからだの使い方 アレクサンダー・テクニーク入門』片桐ユズル監修、北山耕平訳、ビイング・ベットのプレス、2006年。
- パジェス、シルヴィアヌ『欲望と誤解の舞踏——フランスが熱狂した日本のアヴァンギャルド』パトリック・ドゥヴォス監訳、北原まり子・宮川麻理子共訳、慶應義塾大学出版会、2017年〔Sylviane Pagès, *Le butô en France : Malentendus et fascination*, Centre national de la danse, 2015〕。
- 橋本道『ニルス・ブック基本体操』玉川大学出版部、1949年。
- 長谷川六、堀切紘子編『ダンスワーク』「特集 大野一雄・ナンシー演劇祭」vol. 28、ダンスワーク舎、1980年。
- バタイユ、ジョルジュ『ドキュマン』江澤健一郎訳、河出書房新社、2014年。
- 羽永光利「50年、舞姫のイメージを追い続けて72歳 大野一雄さん」『芸術生活』no. 343、1978年、pp. 130-136。
- 羽仁淳『デンマーク体操』杏林書院体育の科学社、1968年（初版：1961年）。
- 「パネルディスカッション 大野一雄・舞踏と生命」『言語文化』第25号、明治学院大学言語文化研究所、2008年、pp. 57-90。
- 原田広美『舞踏（BUTOH）大全——暗黒と光の王国』現代書館、2004年。
- バルト、ロラン『ロラン・バルト著作集 8 ——断章としての身体 1971-1974』吉村和明訳、みすず書房、2017年。
- バルバ、ユージェニオ、ニコラ・サヴァレーゼ『俳優の解剖学——演劇人類学事典——』中嶋夏、鈴木美穂訳、PARCO出版、1995年。
- バロー、ジャン＝ルイ『明日への贈物——ジャン＝ルイ・バロー自伝——』石沢秀二訳、新潮社、1975年。
- 久山忍『西部ニューギニア戦線極限の戦場——飢餓地獄を彷徨した将兵の証言』潮書房光人社、2012年。
- 土方巽『〔普及版〕土方巽全集』I、II、種村季弘、鶴岡善久、元藤燐子編、河出書房新社、2005年。
- 一橋大学附属図書館「平成24年度 日・EU フレンドシップウィーク展示『デンマーク体操：

- あらゆる世代の健康をめざして』Niels Bukh's Danish Gymnastics 解説」、
<http://www.lib.hit-u.ac.jp/pr/tenji/eu/2012/detailEU2012.html#gymnastics>（最終閲覧日：2019年9月1日）
- フェルデンクライス、M『フェルデンクライス身体訓練方法——からだからこころをひらく』
 安井武訳、大和書房、1993年。
- 藤田明史「大野一雄の手の動き——『O氏の肖像』と『ラ・アルヘンチーナ頌』の映像分析」『人文論究』vol. 62, no. 3, 2012年12月、pp. 69-89。
- フレデリック・パイヨード講演会「無為のコレオグラフィー／Unworking と Désœuvrement」『「無為」を巡る五夜——室伏鴻と「苛烈な無為」フレデリック・パイヨードを迎えて』主催：越智雄磨／室伏鴻アーカイブ、Shy、2019年2月20日。
- 星野幸代『日中戦争下のモダンダンス——交錯するプロパガンダ』汲古書院、2018年。
- ボーデ、ルドルフ『リズム体操——運動課題 300 を含む』江口隆哉校閲、万沢遼訳、ベースボール・マガジン社、1970年。
- ボワ、イヴ＝アラン、ロザリンド・E・クラウス『アンフォルム——無形なものの事典』加治屋健司、近藤學、高桑和巳訳、月曜社、2011年。
- 松井覺進編『人物十一景』青木書店、1994年。
- 丸地守「大野一雄の詩魂」大野一雄他『大野一雄』青樹社、1997年、pp. 129-142。
- 三浦雅士『身体の零度——何が近代を成立させたか』講談社、1994年。
- 三上賀代『器としての身体——土方巽・暗黒舞踏技法へのアプローチ』ANZ堂、1993年。
- 溝端俊夫「大野一雄 主要作品解題」『現代詩手帖』2010年9月、pp. 156-160。
- 光安千佳子、島内敏子「江口隆哉のモダン・ダンス——基本運動をとりあげて」『日本女子体育大学紀要』43、2013年、pp.59-68。
- 宮操子『陸軍省派遣極秘従軍舞踊団』創栄出版、1995年。
- 宮川麻理子「大野一雄の舞踏形成期における映画『O氏三部作』分析——身体、イメージを読み解く」『早稲田大学演劇博物館グローバル COE 紀要・演劇映像学 2011』早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」、第1集、2012年、pp. 269-288。
- 「お膳の上で——大野一雄における胎児と母の表象に関する一考察」『表象文化論研究』東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻表象文化論コース、9号、2013年、pp. 2-21。
- 『せめて鋳型に鉄を流し込むようにその踊りの形の中に自分を流し込むことによって』——川口隆夫『大野一雄について』評』『シアターアーツ』2014年春、AICT（国際演劇評論家協会）日本センター、58号、2014年、pp. 76-87。

- 「舞踏の『ことば』の受容——フランスにおける大野一雄への舞踊批評調査」『レゾナンス』、東京大学教養学部フランス語・イタリア語部会、第9号、2015年12月、pp. 98-99。
- 「動き／身体の哲学——大野一雄の舞踏における技法の革新性」『舞踊学』第38号、2016年、pp. 33-42。
- 「脱フォルムの試み——大野一雄『睡蓮』創作ノートの読解より」ニューズレター REPRE No.29、表象文化論学会、2017年、<https://www.repre.org/repre/vol29/note/miyagawa/>（最終閲覧日：2020年3月19日）
- 「献身的な戦略——川口隆夫試論」『研究と批評 季刊ダンスワーク』79、ダンスワーク舎、2017年9月、pp. 14-23。
- 宮田覚造・永田重隆『體育と指導』三友社、1933年。
- 武藤大祐「大野一雄の1980年——国際的な言説の運動とパフォーマンス」『群馬県立女子大学紀要』第33号、2012年、pp. 83-94。
- メルロ＝ポンティ、モーリス『知覚の現象学』中島盛夫訳、法政大学出版局、1982年。
- モラン、アリクス・ド『『瘡瘡譚』第六場：『牧神の午後』への返歌』横山義志訳、川崎市岡本太郎美術館、慶應義塾大学アート・センター編『土方巽の舞踏——肉体のシュルレアリスム 身体のアントロジー』慶應義塾大学出版会、2004年、pp. 150-156。
- 森貴史『踊る裸体生活——ドイツ健康身体論とナチスの文化史』勉誠出版、2017年。
- 森下隆「舞踏譜の舞踏——土方巽の舞踏の構造あるいは作舞の方法」京都造形芸術大学舞台芸術センター編『土方巽——言葉と身体をめぐる』角川学芸出版、2011年、pp. 43-69。
- 『土方巽 舞踏譜の舞踏——記号の創造、方法の発見』慶應義塾大学アート・センター、2015年。
- 「土方巽の舞踏における『病』と『死』の表象——『肉体の叛乱』から『瘡瘡譚』へ」ボナヴェントゥーラ・ルペルティ編著『日本の舞台芸術における身体——死と生、人形と人工体』晃洋書房、2019年、pp. 246-262。
- 安田静「舞踊記譜の歴史——身体・動きを認識するパラダイムの変遷」『Inter Communication』No. 29, Summer、1999年、pp. 70-79。
- 柳澤田実「キリスト教から読む大野一雄——『魚釣り』としての人間」『言語文化』第25号、2008年、pp. 40-56。
- 柳田享『デンマーク體操』三省堂、1931年。
- 山野博大編著『踊る人にきく 日本の洋舞を築いた人たち』三元社、2014年。
- 湯浅慎一『知覚と身体の現象学——身体の意味とそのメタモルフォーゼ』太陽出版、1984

年。

譲原晶子『踊る身体のディスクール』春秋社、2007年。

吉増剛造『舞踏言語——ちいさな廃星、昔恒星が一つ来て、幽かに“御晩です”と語り初めて、消えた』論創社、2018年。

ラ・アルヘンチーナ来日公演プログラム「LA ARGENTINA : Phenomenal Spanish Dancer」帝国劇場文藝部、1929年。

ラバン、ルドルフ・フォン『身体運動の習得』神沢和夫訳、白水社、1985年。

リオタール、ジャン＝フランソワ『リビドー経済』杉山吉弘・吉谷啓次訳、法政大学出版局、1997年。

和栗由紀夫『舞踏花伝』CD-ROM 付属ブックレット (PDF 版)、ジャストシステム、1998年。

——「舞踏とは何か」「舞踏譜考察」『「エコ・フィロソフィ」研究』第10号、2016年、pp. 143-159。

渡辺保「大野一雄残影」『現代詩手帖』第53巻第9号、思潮社、2010年、pp. 86-91。

■外国語文献

Amagatsu, Ushio, *Dialogue avec la gravité*, traduit par Patrick De Vos, Arles: Acte Sud, 2000.

Aslan, Odette, «Du butô masculin au féminin: Hijikata, Ôno, Asikawa, Kasai, Ishii, Nakajima, Takai», *BUTÔ(S)*, ed. Odette Aslan et Béatrice Picon-Vallin, Paris: CNRS Éditions, 2002, pp. 53-101.

Aslan, Odette et Béatrice Picon-Vallin (dir.), *BUTÔ(S)*, Paris: CNRS Éditions, 2002.

Baird, Bruce, “Buto and the burden of history: Hijikata Tatsumi and nihonjin”, Diss. University of Pennsylvania, 2005, Proquest Information & Learning (2005): Microfiche Thesis.

———*Hijikata Tatsumi and Butoh: Dancing in a Pool of Gray Grits*, New York : Palgrave Macmillan, 2012.

Baird, Bruce and Rosemary Candelario (ed.), *The Routledge Companion to Butoh Performance*, Abingdon & New York: Routledge, 2019.

Banu, Georges, «Mythologies de la femme: Bandô Tamasaburô et Ôno Kazuo», *BUTÔ(S)*, ed. Odette Aslan et Béatrice Picon-Vallin, Paris: CNRS Éditions, 2002, pp. 102-108.

Barrault, Jean-Louis, *Réflexions sur le théâtre*, Édition du levant, 1996.

Bataille, Georges, *Œuvres complètes I*, Éditions Gallimard, 1970.

- Bernard, Michel, «Sens et fiction, ou les effets étranges de trois chiasmes sensoriels», *Nouvelles de Danse*, no. 7, octobre 1993, pp. 56-64.
- «Danseurs et tenseurs ou pour une lecture chorégraphique des textes», *Marsyas*, no. 34, juin 1995, pp. 32-36.
- De la création chorégraphique*, Centre national de la danse, 2001.
- Biner, Pierre, «Le requiem amoureux de Kazuo Ohno», *Public*, no. 16, juin 1982, p. 5.
- Birringer, Johannes, “The Un-Seeing Eyes of the Foot: In memoriam Kazuo Ohno”, *Performance Research*, vol. 17, no. 2, April, 2012, pp. 132-138.
- Bolens, Guillemette, *Le Style des gestes. Corporéité et kinésie dans le récit littéraire*, Lausanne : BHMS, 2008 (*The Style of Gestures: Embodiment and Cognition in Literary Narrative*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press, 2012).
- Brandstetter, Gabriele, «Transcription – Materiality – Signature. Dancing and Writing between Resistance and Excess», *Emerging Bodies: The Performance of Worldmaking in Dance and Choreography*, ed. Gabriele Klein, Sandra Noeth, Transcript Verlag, 2011, pp. 119-135.
- Brun, Dominique, «Le trait et le retrait», *Quant à la danse*, n°3, février, 2006, pp. 34-39.
- Centonze, Katja, “Bodies shifting from Hijikata’s *Nikutai* to contemporary *Shintai*: New generation facing corporeality”, *Avant-gardes in Japan. Anniversary of Futurism and Butō: Performing Arts and Cultural Practices between Contemporariness and Tradition*, ed. Katja Centonze, Libreria Editrice Cafoscarina, 2010, pp. 111-141.
- Cohen, Bonnie Bainbridge, *Sentir, ressentir et agir: L’Anatomie expérimentale du Body-Mind Centering*. Traduit par Madie Boucon, Bruxelles: Nouvelles de Danse, 2002. [*Sensing, Feeling, and Action: The Experiential Anatomy of Body-Mind Centering*, Northampton: Contact Editions, 1993 (2012)] .
- De Vos, Patrick, «Le butô de Hijikata et sa part bataillienne», *Artpress2*, no. 42, 2016, pp. 55-59.
- D’Houville, Gérard, «Spectacle», in *Revue des deux mondes: recueil de la politique, de l’administration et des mœurs*, 1927, pp. 918-925(919), Bibliothèque nationale de France, gallica.bnf.fr/.
- Didi-Huberman, Georges, *La Ressemblance Informe ou le Gai Savoir visuel selon Georges Bataille*, Paris: Macula, 1995.
- Phasmes: essais sur l’apparition*, Paris: Les Éditions de Minuit, 1998.

- Dienis, Jean-Claude, «Kazuo Oono – Les Quatre Temps, La Défense», *Les Saisons de la danse*, no. 126, l'été, 1980, p. 16.
- Diverrès, Catherine, *Ellipses–Regards sur 10 chorégraphes contemporains et témoignages sur une décennie de danse*, ed. Antoine Choplin et Patricia Kuypers, Lille: Danse à Lille, 1993.
- «Croisade contre l'inconscience», *Les Saisons de la danse* 243, 1993, pp. 40-41.
- «Kazuo Ohno a 100 ans!», *Lettre d'infos du Centre chorégraphique national de Rennes et de Bretagne*, October 27, 2006.
- «Un jour avec Kazuo Ohno», *Catherine Diverrès mémoires passantes*, ed. Irène Filiberti, L'œil d'or, 2010, pp. 74-75.
- «Ô Sensei . . . », *Stance II et Ô Sensei 公演パンフレット*, Théâtre national de Chaillot 発行、2012年11月 (ページ記載なし) .
- D'Orazi, Maria Pia, “The concept of butoh in Italy: from Ohno Kazuo to Kasai Akira”, *The Routledge Companion to Butoh Performance*, ed. Bruce Baird, Rosemary Candelario, Abingdon & New York: Routledge, 2019, pp. 262-275.
- Elswit, Kate, Miyagawa Mariko, Eiko Otake, and Tara Rodman, “What we know and what we want to know: A Roundtable on Butoh and Neuer Tanz”, *The Routledge Companion to Butoh Performance*, ed. Bruce Baird, Rosemary Candelario, Abingdon & New York: Routledge, 2019, pp. 126-136.
- Faure, Sylvia, «Le pouvoir de se raconter: Autobiographies d'artistes de la danse», *Sociologie et sociétés*, vol. 35, n° 2, 2003, pp. 213-231.
- Foultier, Anna Petronella, “Towards a Phenomenological Account of the Dancing Body: Merleau-Ponty and the Corporeal schema,” *Material of Movement and Thought: Reflections on the Dancer's Practice and Corporeality*, ed. Anna Petronella Foultier and Cecilia Roos, Stockholm: Firework Edition, 2013, pp. 51-71.
- Fraleigh, Sondra Horton, *Dancing Into Darkness: Butoh, Zen, and Japan*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1999.
- Fraleigh, Sondra and Tamah Nakamura, *HIJIKATA Tatsumi and OHNO Kazuo*, New York: Routledge, 2006.
- Franko, Mark, “Where He Danced”, *Dancing Modernism/ Performing Politics*, Bloomington: Indiana University Press, 1995, pp. 93-107.
- Gallagher, Shaun, *How the Body Shapes the Mind*, NY: Oxford University Press, 2005.
- Gauville, Hervé, «La nouvelle danse japonaise: Kazuo Oono, l'aube d'une agonie»,

- Libération*, le 21 mai, 1980.
- Gayon, Jorge, «Hijikata dans «Hôsôtan»: Analyse qualitative du mouvement», *BUTÔ(S)*, ed. Odette Aslan et Béatrice Picon-Vallin, Paris: CNRS Éditions, 2002, pp. 259-267.
- Godard, Colette, «La mort complice», *Le Monde*, le 21 mai, 1980, p. 20.
- «L'enfant qui n'est pas encore né», *Le Monde*, 24, juin, 1982, p. 27.
- Godard, Hubert, «Le geste et sa perception», *La danse au XX^e siècle*, Paris: Bordas, 1995, pp. 224-229.
- «Introduction à l'analyse du mouvement» ユベール・ゴダールによる授業 (2000年10月パリ第8大学ラ・プレヌ・サン＝ドニ、メゾン・ドゥ・カルティエスタジオ) の記録映像、テープ起こし原稿、東京大学総合文化研究科表象文化論コース・舞台芸術アーカイブ。
- Godfroy, Alice, «Infra-danse et pré-verbal: le chantier des gestualités invisibles», *Gestualités/ Textualités en danse contemporaine*, sous la dir. de Stefano Genetti, Chantal Lapeyre et Frédéric Pouillaude, Paris: Hermann Éditeurs, 2018, pp.17-29.
- Greiner, Christine, «Ôno Kazuo: le corps où les mots ne s'inscrivent pas», *La danse en solo: Une figure singulière de la modernité*, dir. Claire Rousier, Centre national de la danse, 2002, pp. 95-104.
- Guilbert, Laure, *Danser avec le III^e Reich : Les danseurs modernes sous le nazisme*, Editions Complexe, 2000.
- Hamp, Amanda, "Score as Catalyst, Memory as Creative Act: Connecting the Work of Tatsumi Hijikata, Kazuo Ohno and Stephanie Skura", *SDHS*, 2011, pp. 45-51.
- Hanna, Thomas, «What is somatics?», *Bone, Breath, Gesture*, ed. Don h. Johnson, North Atlantic Book, 1995, pp. 341-352.
- Hargreaves, Martin, "Dancing the Impossible: Kazuo Ohno, Lindsay Kemp and Our Lady of the Flowers", *Jean Genet: Performance and Politics*, ed. Clare Finburgh, Carl Lavery, Maria Shevtsova, New York: Palgrave Macmillan, 2006, pp. 106-116.
- Hutchinson Guest, Ann, *Choreo-graphics: A Comparison of Dance Notation Systems From the Fifteenth Century to the Present*, New York: Gordon and Breach, 1989.
- Hutchinson Guest, Ann and Claudia Jeschke, *Nijinsky's Faune Restored*, Noverre Press, 2010.
- Jeschke, Claudia, «Les systèmes de notation de la danse: une histoire culturelle de la perception du corps et du mouvement», *Histoires de corps: à propos de la formation du danseur*, Paris: Cité de la musique, Centre de ressources musique et danse, 1998,

- pp. 217-230.
- Kant, Marion, "German Gymnastics, Modern German Dance, and Nazi Aesthetics", *Dance Research Journal*, vol.48, issue 2, August 2016, pp. 4-25.
- Koegler, Horst, *The Concise Oxford: Dictionary of Ballet*, Second edition, London: Oxford University Press, 1982.
- Kurihara, Nanako, "Hijikata Tatsumi: The Words of Butoh", *The Drama Review*, 44.1 (Spring 2000), pp. 12-28.
- «Hôsôtan: sphère sonore et chorégraphie», *BUTÔ(S)*, ed. Odette Aslan et Béatrice Picon-Vallin, Paris: CNRS Éditions, 2002, pp. 277-288.
- Laban, Rudolf von, «Tanzschrift und Schrifftanz», dossier préparé et textes traduits par Axelle Locatelli, *Mémoires et histoire en danse*, Mobiles no. 2, sous la dir. d'Isabelle Launay et Sylviane Pagès, Paris: L'Harmattan, 2010, pp. 221-236.
- Lamarque, Anne-Laure, «Le dansé et l'art comme véhicule: butô(s) entre France et Japon» (演劇学博士論文、指導: Jean-Marie Pradier、パリ第8大学、2012年) .
- Lartigue, Pierre, «L'émotion pure: Une nouvelle façon de danser venue du Japon», *L'Humanité*, le 16 juin, 1980.
- Launay, Isabelle, *A la recherche d'une danse moderne: Rudolf Laban- Mary Wigman*, Editions Chiron, 1996.
- Leabhart, Thomas. *Etienne Decroux*. NY: Routledge, 2007.
- Lehrer, Jonah, *Proust was a Neuroscientist*, Edinburgh: Canongate Books, 2011.
- Lequeux, Alain-Paul, «Kazuo Oono aux Quatre Temps de la Défense», *Pour la danse*, no. 62, juillet-août-septembre, 1980, p.18.
- Levinson, André, *La Argentina: A Study in Spanish Dancing*, Paris: Editions des chroniques du jour, 1928.
- Louppe, Laurence, *Danses Tracées: dessins et notation des chorégraphes*, Paris: Dis Voir, 1991.
- «Quand les danseurs écrivent», *Nouvelles de Danse*, n° 23, printemps 1995, pp. 14-21.
- Miyagawa, Mariko, «Kazuo Ohno's Dance and his Methodology: From Analyzing his Butoh-fu», *Congress on Research in Dance Conference Proceeding*, Volume/2015, 2015, pp. 117-124.
- «Is it kitsch or...? Ohno Kazuo's Body Overflowing in the Contemporary Dance Scene», in Rina TANAKA, Mariko MIYAGAWA, Ken HAGIWARA and Hayato

- KOSUGE, «Overflowing Local Bodies in Global Age—(Re)presentations of Japanese Bodies in Different Theatrical Forms Inside and Outside Japan During the Period of (Post-)Globalization», 『西洋比較演劇研究』 vol.17, no.1, 2018, pp. 35-53 (pp. 42-47).
- «Ohno Kazuo's lessons for a French choreographer: *Ô Senseï* by Catherine Diverrès», *The Routledge Companion to Butoh Performance*, ed. Bruce Baird, Rosemary Candelario, Abingdon & New York: Routledge, 2019, pp. 519-524.
- Montet, Bernardo, «Témoignages», *Butô(s)*, ed. Odette Aslan et Béatrice Picon-Vallin, Paris: CNRS Editions, 2002, pp. 332-333.
- Morant, Alix de, «Hôsôtan, sixième tableau. En écho à *L'après-midi d'un faune*», *BUTÔ(S)*, ed. Odette Aslan et Béatrice Picon-Vallin, Paris: CNRS Éditions, 2002, pp. 268-278.
- Pagès, Sylviane, «Le plus vieux danseur du monde: Légende d'une verticalité épuisée», *Repères: Cahier de danse*, no. 24, 2009, pp. 12-14.
- Paxton, Steve, *Material for the Spine*, Contredanse, DVD-ROM, 2008.
- Perrin, Julie, «Une lecture kinésique du paysage dans les écrits de la chorégraphe Simone Forti», *Raison Publique*, no. 17, 2012, pp. 105-119.
- Pouillaude, Frédéric, «D'une graphie qui ne dit rien: les ambiguïtés de la notation chorégraphique», *Poétique*, Paris: Éditions du Seuil, n°137, février 2004, pp. 99-123.
- *Le désœuvrement chorégraphique: Étude sur la notion d'œuvre en danse*, Paris: Librairie Philosophique J. VRIN, 2009.
- «L'œuvre chorégraphique: ni autographique ni allographique», *Philosophie de la danse*, sous la dir. de Julia Beauquel et Roger Pouivet, Rennes: Presses Universitaires de Rennes, 2010, pp. 167-177.
- Ropa, Eugenia Casini, «A soul that "wears the body as a glove": German Ausdruckstanz and Butô», *Avant-gardes in Japan. Anniversary of Futurism and Butô: Performing Arts and Cultural Practices between Contemporariness and Tradition*, ed. Katja Centonze, Libreria Editrice Cafoscarina, 2010, pp. 105-110.
- Roquet, Christine, «Être debout», *Histoires de gestes*, sous la dir. de Marie Glon et Isabelle Launay, Arles: Actes Sud, 2012, pp. 23-37.
- Ruth Page, Kreutzberg Available for Concerts*, Jan. and Feb, 1935, J. F and March, 1936.

- Schwellinger, Lucia, "Ohno Kazuo: Biography and methods of movement creation", *The Routledge Companion to Butoh Performance*, trans. Charlotte Marr & Rosemary Candelario, ed. Bruce Baird, Rosemary Candelario, Abingdon & New York: Routledge, 2019, pp. 113-125.
- Sermon, Julie, «Partition(s): processus de composition et division du travail artistique», *Partition(s): Objet et concept des pratiques scéniques (20^e et 21^e siècles)*, Dijon: Les presses du réel, 2016, pp. 25-232.
- Shiba, Mariko, «Modern Dance in Japan: The Influence of the Western Culture and What Japan Created on its Own(日本のモダンダンス:西洋文化 から受けた影響と日本人が生み出したもの)», 『表現文化研究』 6 (1), 2006, pp. 117-125.
- Sirvin, René, «Maniérisme», *Le Figaro*, le 26 juillet, 1994, p. 22.
- Suquet, Annie, *L'Éveil des modernités: Une histoire culturelle de la danse (1870-1945)*, Pantin: Centre national de la danse, 2012, pp. 837-839.
- Szentpál, Maria, «La perception du mouvement», traduit par Jean Challet et Jacqueline Challet-Hass, *Quant à la danse*, no. 2, juin 2005, pp. 50-54.
- Thomasen, Eivind and Rachel-Anne Rist, *Anatomy and Kinesiology for Ballet Teachers*, Hampshire: Dance Books, 1996.
- Vasilakou, Antonia, «Le mime tragique dans les mises en scène de Jean-Louis Barrault. Quatre exemples: *Antoine et Cléopâtre*, *La Faim*, *Baptiste* et *Les Suites d'une course*» (舞台芸術学博士論文、指導: Jean-Louis Besson、パリ＝ナンテール大学、2014年) .
- Viala, Jean and Nourit Masson-Sekine, *BUTOH – Shades of Darkness*, Tokyo: Shufunotomo Co., 1988.
- Wavelet, Christophe, «Kazuo Ohno ou les ressources de l'épuisement», *Vacarme*, 1997/1 (n° 1), pp. 52-53.
- Weill, Etienne Bertrand, [Recueil de photographies. Jean-Louis Barrault. Mime corporel. 1948], Bibliothèque nationale de France, gallica.bnf.fr/.
- Williams, Drid, *Teaching Dancing with Ideokinetic Principles*, Urbana, Chicago and Springfield: University of Illinois Press, 2011.
- Yoshida Yukihiko, «Oikawa Hironobu: Bruinging Decroux and Artaud into Japanese dance practices», trans. Bruce Baird, *The Routledge Companion to Butoh Performance*, ed. Bruce Baird, Rosemary Candelario, Abingdon & New York: Routledge, 2019, pp. 137-141.